

八幡事件

宇和島市

1 血で染められた秋祭り

昭和 23 (1948) 年 10 月 16 日、宇和島市の八幡^{はちまん}神社の秋祭り。そこには A 地区の部落からもいなせな装束に身を包んだ大勢の若者が、子どもたちを乗せた『ヨイサ』と呼ばれる太鼓台を担いで市内を練り出した。



現在のヨイサ

その『ヨイサ』が昼をまわったころ、街角で小休止している時だった。祭りに集まった大衆の面前で、戦後の新興暴力団の一人が公然と差別的・侮辱的暴言を吐いたのである。そのあからさまな差別発言に怒った青年の一人と小競り合いとなり、暴力団員は、よろけたはずみで頭にけがをした。それを恨みに思った暴力団 20 数名が祭りの最中に二度にわたって襲撃してきた。

一度目の襲撃の時は、部落の青年たちの必死の防戦で、何とか追い返すことができた。しかし、二度目は、暴力団員たちが拳銃や日本刀で武装して襲撃してきた。警察署長の「君らの命は、我々が保護する」の指示で、棒切れ等を没収されて無防備になっていた部落の青年たちは、果敢にも素手で立ち向かった。中には垣根から棒杭を引き抜いて応戦した者もいた。その時、警官たちはその凶行をなすがままに任せて傍観しているばかりで、ついに、双方に死傷者が出た。

祭りの街を血に染めたこの大惨劇は、時間にしてわずか 10 数分の出来事であった。

2 部落の人たちの立ち上がり

当時の地元の新聞は、八幡事件の真相を決して正しく伝えておらず、なかには、市民の部落に対する「怖い」という意識や「憎しみ」をあおりたてるような記事さえあった。

いつのまにか市民の間では、「部落の人らは、ヨイサの中にピストルや日本刀やらの武器をがいに (たくさん) 隠し持つって、大立ち回りをしたような」など、加害者と被害者が入れ替わった形で世間に広まっていった。

また、事件処理に当たった市警察は、あまりにも差別的な見込み捜査や聞き取りに終始していた。一方、市長・議会・市公安委員会の対応も不誠実極まるものであった。

そのようななか、部落の指導者たちは、一人一人に「差別から逃げずに、闘い抜く」ことの意義を訴え続けた。やがて、「部落解放は、我々自らの手によって勝ち取らねばならない。そして闘争の武器は暴力であってはならない。正しい知識と情熱こそが我々の武器だ」という結論に達し、ついに全国組織と連帯して部落の住民集会や真相発表演説会を開いて、差別糾弾闘争を開始した。そして、地元で斗争委員会を立ち上げ、「斗争ニュース」を発行するなど、闘争運動を展開していった。

しかし、裁判闘争では部落側が主張した正当防衛が認められず厳しい判決となった。そして、行政闘争の結果、市議会に八幡事件特別委員会が設置され、事後処理及び今後の対策について協議することとなった。この事件は、宇和島市における同和行政の始まるきっかけとなった。この行政闘争は、京都で起こったオールロマンス事件 (昭和 26 年) の 3 年前のことである。

3 誇り得る血は、涸れずにあった

ムラのリーダーたちは、部落解放についていろいろ話合いを重ねた。その話合いの中で、「自分たちにとって、このムラがこの世でたった一つの故里やないか。この故里のどこが悪いだろうか。吾々は何のために生まれてきたのだろうか。差別されるために生まれてきたんじゃない。この世に生まれたからには、何か後世に残ることをやろう」と決意した。

そこで、ムラのお寺の縁起「龍の伝説」を基に太鼓演奏曲がつくられ、昭和47(1972)年に「龍心太鼓」が結成されるきっかけになった。青年たちは、差別に対する怒りの拳をバチに握り替えて猛練習を重ねていった。誰からともなく「この太鼓は人間解放の太鼓じゃ、解放への叫びだ!」という言葉が自然に出るようになり、解放に向けての主体性や連帯感が芽生えてきた。

その後、活動を続けているうちに、平成3(1991)年、後継者である「解放子ども会」の子どもたちが中心となる太鼓集団「無邪気」が結成された。

今なお、燃え上がる人間解放の叫びをのせた太鼓の響きは、世代を超え、地域を越えてつながり、そして広がっている。

4 事件の教材化

～人権劇「ああ、解放の旗たかく」上演～

事件から46年後の平成6(1994)年に、八幡事件を風化させてはならないとの思いで、教材づくりをすることになった。

そこで、市の同和教育推進委員会や解放子ども会の指導者及び子どもたちが中心となって、この事件を実際に体験された方々からの聞き取り調査を行った。また、当時の新聞記事・各種出版物・裁判記録等の基礎資料による調査で事件の確認もし、それを基に解放劇「ああ解放の旗たかく」を制作した。

その年の12月「人権を考える市民の集い」で劇を上演した。その集会で「八幡事件」のことを憶えていた参加者の中には、初めて事件の真実が分かったという人たちが多くいた。また、子ども会や高校生友の会で学んでいる子どもたちも、先輩たちの姿から部落解放への熱い情熱を学びとるよい機会になった。



全国大会で披露された龍

5 八幡事件闘争運動に学ぶこと

事件後、ムラの人たちは毎晩のように本堂に集まって話合いを続けた。その結果、差別の不当性を正しく認識し、差別から逃げることなく闘い抜き、部落解放への意欲を燃え上がらせた。そして、リーダーたちの、「部落解放は吾々自らの手によって勝ち取らねばならない。そして、闘争の武器は暴力であってはならない。正しい知識と情熱こそが、吾々の武器だ」というしっかりした解放理念は、今、確実に青年や子どもたちへと引き継がれている。

[参考資料]

宇和島市人権教育協議会編纂 八幡事件資料収集・編纂委員会発行
『解放への軌跡 八幡事件闘争記録と宇和島市の解放運動』